

## なしジョイント栽培における成園時の収量性と側枝更新方法の実証

### 要約

なしジョイント栽培における定植7年生樹の単収は約3.1tで慣行栽培と比較して104%と多いことが確認された。また、側枝更新方法として、4月中旬～5月上旬に側枝基部へ環状剥皮を行うことで、処理した側枝の55%以上で新梢の発生が促され、予備枝の安定した確保につながった。

### ○ 展示のねらい

ここ数年、ジョイント栽培の導入が拡大しているものの、成園化した事例は極めて少なく、収量性の客観的な評価を行う必要がある。また、樹齢経過とともに優良な側枝の確保が難しく、側枝更新方法として、側枝基部への環状剥皮処理による新梢発生効果を実証する。

### ○ 主な成果

収穫時の着果数は、ジョイント栽培樹で7,175果/10aとやや少なかったものの、平均果重が434gと大きく、単収では3,115kg/10aと慣行比で104%と多くなった(表1)。

側枝基部への環状剥皮処理による新梢発生率は、4月中旬処理で61.5%、5月上旬処理では55.6%であったことから、処理時期が早いほど効果は高いと考えられた(表2)。

表1 なしジョイント栽培の収量特性

栽培方式	着果数 個/10a	収量 kg/10a	平均 果重 g
ジョイント栽培(7年生)	7,175	3,115	434
慣行栽培(10年生)	7,625	2,995	393

表2 側枝基部の環状剥皮処理による新梢発生効果

処理日	処理した 側枝数(平均)	新梢 発生率	平均 新梢長
4月11日	2.6本/樹	61.5%	85.8cm
5月7日	3.6本/樹	55.6%	92.2cm



写真 環状剥皮による予備枝の確保

### ○ 今後の方向性

ジョイント栽培は、成園時においても慣行栽培以上の収量が確保され、特に果実肥大が優れることが分かったことから、今後の改植等の推進に活用する。

側枝更新方法として、側枝基部への環状剥皮処理の有効性が認められ、機械的にこなせる作業であることから、普及性は高いと考えられた。なお、生産現場では、作業面を考慮すると、落弁期を過ぎた農閑期にあたる5月上旬処理が適当であると判断された。

また、環状剥皮によって樹勢低下を招かないよう、処理する側枝数は全体の1/3程度までを目安とする。

実施機関：芳賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：芳賀町

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315